慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュマーレンバッハの経営経済学研究方法について（一）
Sub Title	Method of study in Schmalenbach's Betriebswirtschastslehre
Author	小高, 泰雄 古沢, 源刀
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.1 (1949. 1) ,p.1- 14
JaLC DOI	10.14991/001.19490101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應出版社

著者	書名	判型	頁	定價
高橋誠一郎著	經濟學史略	A5	五九八	四二〇圓
千種義人著	經濟原論總說	A5	三四六	三〇〇圓
吉田啓一著	基本經濟學	A5	三三〇	一五〇圓
高村象平著	一般經濟史（古代・中世）	A5	二〇六	二〇〇圓
林毅陸著	歐洲最近外交史	A5	七一六	五〇〇圓
加田哲二著	如何にして學ぶべきか 前篇 社會科學の研究	B6	一二八	一三〇圓
加田哲二著	如何にして學ぶべきか 後篇 論文の書方・講演の仕方	B6	二二〇	一五〇圓

三田學會雜誌 第四十二卷 第一號 昭和二十四年一月

シュマーレンバッハの經營經濟學研究方法について（一）

小高泰雄

古澤源刀

本篇は F. Schönpflug; Das Methodenproblem der Einzelwirtschaftslehre. Stuttgart, 1933 に掲載されたるシュマーレン教授の經營學研究に對する方法論的批判を要約紹介したものである。本書は其の書名に見る如く方法論上の問題を取扱つてゐるからして、シュマーレンバッハの個々の研究問題に關する專門的檢討ではなくして、其の研究方法に對する一般的態度が論述し批判せられてゐる。シェーンプフルークは科學の分類を以つて專門科學的には行ひ得るものではなくして、其の根柢となつてゐる各研究者の思想的或は觀念的體系の中にこれを求めようとする。經營學研究に於ける規範的方法と經驗現實的方法とは斯學の分類をこの點にかゝはらしめる根本的分類であるとし、シュマーレンバッハ、ライトナー、シュミット、リーガーを經驗的方法によるものとし、而してシュマーレンバッハに其の最高の代表者を見出してゐるのである。彼によつて、近代經營經濟學は一の轉期を畫したことは何人も疑ひ得ないところである。しかして、彼の取扱つた問題が主として資本計算を中心課題として展開してゐるのであるが、最近に於ける經營學上の研究對象は更に進んで經營組織の內面に滲透しようとした點に於いて更に今一つの轉期を迎へようとしてゐる。しかし斯學の體系化を志向するものが、彼の方法論上の立場を反省して見ることは、この際十分意義あることゝ考へるのである。

シュマーレンバッハの經營經濟學研究方法について

一

シュマーレンバッハが經營經濟學研究に於いて彼の商業研究雜誌（Zeitschrift für Handelsforschung）の發刊廿五週に際して執筆したる記念論文の中に最も單的に表明せられてゐる。即ち「私見によれば、經營經濟學は究極に於いて直接或は間接に實際經營に役立てねばならない。若しそうでないなれば、吾人には何等の興味もない。私が望んでゐる實際に役立つことを世人が、それは技術論である、と呼ぶなれば呼んでもよい。その技術論こそ私の求める科學である。」（註一）寔に教授は私經濟學に於いて純然たる經驗科學者の立場に立つてをり、從つて其の著作位ひ經驗現實的研究の可能性と限界を示してゐるものはない。具象的に與へられざるもの、經驗的に知覺し得ざるものは教授にとつては認識可能性の限界外にあり、それは科學の範圍外であつた。無條件にその確實性を主張し得るもの、即ち客觀的認識こそ經驗の範圍内に屬してゐたのである。この客觀的認識はしかしながら、規範科學に於ける普遍妥當性なるものと根本的に相異してゐる。規範科學の求むる價値なるものは、經驗現實とは異つた常住不變の永遠的認識である。經驗論者にとつては決定的不變の認識なるものはない。客觀的認識なるものは、假定的に思惟せられるに過ぎず、そは更に經驗を通じて確證し得ると云ふ前提に於いて妥當するに過ぎないのである。教授にとつては諸科學は外的經驗の世界を統一的に認識せんが爲めの技術的方便に過ぎない。實在を把握し記述し得る爲めには根本的には二つの方法がある。即ち一は事實に基付く觀念的經驗――これは事實の時間的要素を無視し單に其の意味の綜合を再現せんとするものであり、他は現實的經驗――その經驗は認識主體に對してその歴史的に制約せられた直接性具象性によつて把握せんとするものである。この方法論の相異によつて、理論科學と實際科學に分たれる。理論科學に於いては、觀念的事實、實際科學に於いては現實的事實をそれぞれ對象とすることにより、その構成を異にしてゐる。理論は現實の原因、生起、關聯の問題を探究し、現象が如何にして、或は何故に然るかを理解せんとするものである。之に反して實際科學の認識論的基礎は、その現象の緣由を研究せんとするものではなくして、先づ現象は如何なる狀態にあるかと認識せんとするものである。理論科學は論理的正當性（Logische Richtigkeit）を認識目的とするものであり、實際科學はこれに反し、論理的合目的性（Logische Zweckmäßig）を追求せんとする。

さて教授が最初に研究に着手した當時に於ては經濟科學と經濟の實際界とは分離し、科學は實際を輕んじ、實際は科學を無視すると云ふ狀態であつた。實際界が要求したものは、特殊の經營問題を取扱ふ經驗科學であつた。しかして擴大しつゝあつた企業結合は、高度の科學を基礎とする經營技術を要求し、こゝに一つの科學を必要とする基盤があつた。即ち經營者自身の要求に基付いて所謂實業人に有用なる立場より科學の改造が求められてゐたのである。この目的を實現せんが爲めに、經營經濟學の研究範圍を實業界に求めて來た從來の永傳統を破碎し、新らしい科學の運命と重點は廣義の生産經營、特に工業經營に有することが教授の如き鋭き頭腦には容易に感得せられたのである。

新科學の構成に於いてそは理論科學たるべきか實際科學たるべきかは彼に對して重大な問題とはならなかつた。何となれば前述の如く、先驗的に、實際科學こそ好ましきものにあると思惟してゐたが故である。教授は前掲雜誌の論文に於いて斯學の本質を左の如く述べてゐる。

「經營技術は一つの技術科學である。それは生起關係を問題とするものではなくして、對象に對する處理を目的とするものである。」（註二）この處理方法を以つて教授は技術論（Kunstlehre）と呼び、技術學こそ實驗によつて論旨の正當性を吟味し得る長所を有するものとして、これに無條件に優位を認めてゐる。この原則に從つて個別的、研究に

力を用ひ、其の結果を前掲の雜誌に發表してゐる。その如何なる時期のものをとつて見ても、研究の必要を實際に適用し、これを利用し得るとの觀點を離れてゐない。教授は云ふ。「吾人は實用に供し得ることを目的として、研究に努力しなくてはならぬ。人によつてはかゝる研究の科學性を奪ふものなりと云ふかも知れぬ。しかしそれは定義の問題に過ぎない。……研究の結果が實際に役立たぬものは、研究の成果でなくしてその道程に過ぎない」と。（註三）

註一　Schmalenbach; „25 Jahre" Z.H.F. 1931. Heft 1.

註二　Schmalenbach; Kurs des $. Wechsels Z.H.F. 1907

註三　Schmalenbach; Richtlinien über die Behandlung von Fragen des Warenverkehrs Z.H.F. 1911.

II

教授によれば經濟は其發展が文化の樣相に決定的影響を與へ且之を形成して行く根本力であるとする。經濟は全體として一つの有機體を爲し、自然と同樣に冷嚴假借なき必然性に支配せられ時には數學的精確さを有する盲目的機械的法則によつて貫徹されてゐる。一個の個人としては經濟に內在する法則に順應してのみ經濟し得るのであり決して之に反抗しては經濟を營み得ない。個人は從つて經濟を動かす主動者ではなく、「道具であり、道具以外のものではない」のである。經濟全體の內部に於ける法則的秩序の特質は經濟の個々の部分と全體とを有機的に調和せんとする一つの指導原理や計畫（プラン）によつて招來されるものではないことに存する。寧ろ經濟の本質は個々の經濟主體の人格的自由並に經濟的自由が原則として認められる所に存する。洵に個人の自由を保證し且擁護することこそ國家及其餘の社會的制度の根本的任務とする所である。國民經濟の機構の內部に於て總體の欲求が充足せるが爲には個人の經濟諸力が自由に活動し得る刺戟が必要である。而して現代の貨幣經濟に於てはこの經濟活動を行ふ刺戟は富の集積を實現する合法的手段として存在する。全社會のための欲求充足は、經濟主體の個人的取引の結果生ずる私利益を實現する手段である。個々の經濟主體が個人的利益を實現し得んが爲には先づ以て各個人が自由競爭の篩（ふるい）にかけられねばならぬ。そは自然に於ける冷嚴なる生の闘爭（struggle of life）にも比せるべく、勝敗と適者生存を結果するのである。市場は競爭社會の象徴であり、價格は經濟的適者と不適者との判定者であると云はねばならぬ。競爭の原理によつて假令目先きでなくて長い期間を要するかも知れぬが經濟的適正が（wirtschaftliches Optimum）を貫徹されねばならない。自由競爭の導入こそ經濟を靜止の狀態より絶えず流動する動態の態勢にかりたてるものであり、他の經濟規制に於ては見られない程度の、消費者の需要に對する生產機關の彈力性と適應性を招來する。

この經濟秩序の體系こそは十九世紀の初頭、西歐並に米國に自由資本主義として歷史的に確立を看、更に第一次世界戰爭によつて著しい變化を遂げたが茲には深く觸れない。自由資本主義こそ教授の禮讃するところであつてかの有名なるウキーンの講義に明らかに知り得らるゝ所である。教授は自由資本主義に訣別の辭を述べてゐる。それに自由經濟に深く傾投し、今や去り行く自由主義に盡きざる連綿の情を抱くものにてこの語を見るのである。『自由經濟を伴べる此十九世紀化の何れの時代とも異なる所以のものは自由經濟によつて自然そのまゝの假借なき點に求めらるゝと推測するものである。この世紀が他の世紀とは異なる特異性はその技術的經濟的成果が偉大なりしによるに非らずして、この世紀の經濟が最も自然自體に相似してゐたが故である。更に精確に云へば自然に於けるが如く個人と種族の制限なき競爭によつて優者は何等阻まれることなく繁榮し、劣者は無慈悲にも敗退死滅せざるを得なかつたからである。之と同時に十九世紀は組織と云ふ手段によつて成果を收めたのであつた。この組織こそ後世更に一層大なる規模に使用せられねばならなかつた』と述べてゐる。（Die Betriebswirtschaftslehre an der Schwelle der neuen

Wirtschaftsverfassung (Z.H.E. 22 Jahrg. S. 242)

吾人は經濟的自由主義を肯定せんとする主たる説明の根據を資本主義を離れて經營經濟學なしとする主張に求むるものである。資本主義經濟なる問題より經營にその素材と內容を付與するあらゆる問題がある。資本主義は個別經濟に分業と特殊專門化と更に機械的生產手段の集中的使用などを齎らした。又大經營と大量生產を招來し、これがため販賣は最近の經營と經濟の運行に生命に關する重要なる問題となつたのである。又資本主義なるものは實質的內容を離れて、價値の基礎を抽象的貨幣價値によつて表示しかくて費用（原價）と給付（收益）の兩極間に働く目的思惟を創造した。資本主義下の個別經濟に於いて初めて「經營の內部探究」と云ふことが重要となりその結果傳統的な實際の方法はも早役立たぬものとなつたのである。

資本主義が漸く成熟するに從ひ、單に經營者の指導的性格に依存してゐた非合理的根元を解明し、之に客觀化された基礎を與へようとする傾向に向ひつゝあるのを見るのである。この傾向こそ人間及その個人的の利己的動機を第二義的のものとし目的主體としてその經營運行の組織的政策的手段を有してゐる企業を研究の對象とする結果となつた。シュマーレンバッハ教授は夙にこの見地を重要なる點として强調したのであつた。教授は既に彼の有名な論文（Die Privatwirtschaftlehre als Kunstlehre ZHF 6. Jahrg.）に於て經營經濟學の基礎は實に如何にして最も儲けることが出來るかでなく、如何にして物を最大の經濟を以て生產するかにあるとした。從つて最も重要な事は如何にして經濟體にその健全性を保持せしめ且健全性を回復し得るかである。かくて經濟主體の所得獲得の努力は經營運行の第二義的課題となつた。經營組織が企業運營の中心的問題となり、計算制度はその重要なる統制管理機關となつたのである。

教授は經營者に必要なる能力は經營經濟に於ける弱點、機構上の缺陷故障現象に對する特殊なる感覺であると述べてゐる。經濟的思惟に對する能力、總ての現象に經濟的基準をあてはめ迅速且特別の努力なしに其不經濟性を發見する素養は極く少數の人にのみ期待し得る所である。故に教授はこの經營經濟思惟を養成し斯學を通じて之を普及するのは學問的經營經濟學の最高の任務であるとした。あらゆる點に於ける經濟性を追求する經營は單なる利潤の衝動によつて導かれてゐる私營營利機關と既に概念的に別の範疇（カテゴリー）に屬してゐる。

『商人にとつては所得を得んとすることが自己目的であるかも知れないあたかも又醫師も亦人の病氣を治療して儲けることが自己目的であるのと同樣である。しかし專門科學にとつては商人として行はれてゐる仕事が全體經濟の意味に於ける經濟的最適の原則に從つてなされると云ふ點のみが問題となる。そしてこの點のみが科學的研究を要求してゐるのである。（註一）

右に表明された教授の告白は教授が自由資本主義を如何程禮讚せるにせよ、その內心に於ては既に動搖して居たことを表明せるものに外ならぬ。玆に疑ひなく暗示せらるゝことは利潤は或條件の下に於てのみ競爭に於ける規制者としての職能を許されることである。併し乍ら無條件的營利追求は、自由資本主義の本質に內在せる所である。此原理が廢止又は諸種の制限付で適用せられる經濟は最早や自由經濟とは云へぬ。而して吾人の眼前に生起しつゝある私經濟の變化の中にその經濟制度の根本的轉換の最も意義深き徵候を認識した教授が觀取したところのものは社會主義ではない。何となれば私有財產制度が依然存置せられてゐる故である。そは構造的には別個の資本主義の形態と稱せらるべきもので、卽ち個別經濟の原理に基いた拘束經濟の特徵を持つものであつた。この經濟は個々の利營と團體的利害、自由と强制との綜合（ジンテーゼ）より生成し、我々の目には制限を受けたる競爭、拘束されたる市場として映ずる。そのもと

に於いて私經濟的效用よりも團體的效用が重視せられ、所謂公益優先の新しい倫理の形成せるを見る。教授は商工業者がこれまでになく國民としての義務、國家經濟的機能としての經營任務について要求せられつゝあることは今日の時代の最も重要なる成果の一つと考へると述べてゐる。（注二）

最近二十年に渉つて見受けらるゝ資本主義の動搖の原因は教授は經營內部に於ける生產費の變動にあると考へた。經營規模は漸次擴大せられつゝあるが之によつて固定費と比例費との關係を根本的に變化させた。自由經濟時代に於て生產費が根本的に比例的性質のものであつたのを特徵とすれば今日の生產方法に於ては生產過程の比例費部分が固定費の占める部分に比し漸次小額となりつゝある。然も固定費の占める部分が生產を左右するに至れるを多く見受けるのである。此現象は個人的市場生產の基礎を阻害し且生產者を自由市場より離脫し相互に協定するを餘儀なくせしめたのである。大規模の企業集中運動と同時に國家は其集中された經濟力の擁護者促進乃至企畫者として重要さを加ふるに至つた。國家の干渉は經濟上排除せられずして寧ろ求められたのである。

かゝる情勢上より、教授は經營經濟學に對し、殊に經營組織論上に於て漸新且極めて重要なる任務の生じつゝあるのを認めたのであつた。教授はかゝる轉換期に際し新經濟に於ける攪亂的事實を觀察し、診斷學的（ディアグノスティシュ）に其病源を確定するのみでなく攪亂的事實を除去する手段を解明せんが爲に今後一層經營經濟學に依據すべきことを要望したのである。（注三）シュマーレンバッハ教授は「人は單に災害と過失によつて窮乏する如き一新經濟政策の理想に協力し全體經濟の發展を企圖することを以て經營經濟學の最高の任務なりとしたのである。

注一　Schmalenbach; Grundlagen dynamischer Bilanz 2 aufl. Leip 1919. S. 5.

注二　Schmalenbach; a. a. O. S. 12.

注三　Schmalenbach; Die Betriebswirtschaftslehre an der Schwelle der neuen Wirtschaftsverfassung. S. 250.

三

一つの經驗的事象の範圍に關聯して、二層正確に云へば此事象範圍の一定の側面に關聯して一團の諸問題が——同一の事象（對象）に關聯して居る諸問題と一團の諸問題が又一に包括された集合體として統合されると云ふ樣な樣式に——提起されるとき始めて嚴密なる方法論的意義に於ける學問として論議し得るのである。個々の問題を類型化することから學問上の類型化が成立する。

教授の經營經濟學にとり上げられた經驗對象は根本的には國民經濟學の對象と同一である。即ち經濟がそれである。然し、嚴密には、同一の範圍に屬する、經驗對象であるからして、經驗對象のみにては各學問の差違を確定し得ない。屢々引用せられる全體經濟と個別經濟と云ふ二つの對立する基礎觀念を以つてしてもこの限界を設けるには不適當である。或狀況の下にあつては經營經濟學の對象は全體經濟であり得るし、國民經濟學も亦同樣個別經濟を研究對象とすることを拒否し得ない。しかし、研究の成果は構造的に相違せることを示し、此相違によつてこの兩科學は夫々相違した科學に屬することが正當化されるのである。此意味に於て教授は單て國民經濟學と經營經濟學が其素材の大部分を共通して居るが精神（Geist）を異にしてゐると述べてゐる。

經驗を通じて與へらるゝ對象は科學的認識の夫々の側面と夫々の觀點によつて科學的經驗となるのである。一つの科學の特殊な認識目的はその經驗對象に對する特殊な關係から構成せられることを識らねばならぬ。

經驗の對象に於て物の本質に對して決定的なものたらしめてゐる所の諸特徵（メルクマール）に從つて經驗對象のたゞ此一面にの

み關聯してゐる諸種の問題が生れるのである。

經濟それ自體、生計維持に役立つてゐる制度や方策の文化的事實としての經濟、もつと正確に云ふならば最近の經濟即ち、最近の一〇〇年から一五〇年に生起した狀況こそ教授が注目した所の經營經濟學の經驗的對象である。此の尤大なる事實について第一教授の興味を惹いたのは交換現象であつた。即ち經濟者の欲望充足は原則として自己生產によらず、貨幣の媒介によつて可能となつた他人の欲望を充足に對する諸財貨の迂回生產のみに注目したのであつた。教授の見解によれば此興味は國民經濟學と雖も貨幣交換現象を研究するに區別はないのである。國民經濟學は科學として成立以來貨幣交換現象に關聯した問題に非らざる他の問題を研究したことはないからである。教授がとり上げた問題の選擇は當始から特に明らかに經驗的事實上に於て本質的なりと思惟せられた特徵が國民經濟學に於ける問題の取り上げ方と全く違つた方向にあることを示してゐる。國民經濟學は特に理論上に於ては價格現象に關聯して限定せるべきあると捻へ目に云ふことが出來やう。

此に反し教授が交換經濟なる經驗的事實に注目したるは全く異つてゐる。教授は之を自身の問題提起に對し重要點たらしめたのである。諸財は價値を有し、價値あるが故に價格を實現する。欲望充足に於いて無制限に存在せず相對的稀少性を有するが故である。效用と稀少性とは價値の積極、消極の構成要素である。價格は市場協同體により表明せられる、目的追求の欲求の結果として自由市場に於いて成立する限りに於て客觀的に表明せられたる價値である。その價値に對しては個々の經濟主體は比較的僅少なる影響を有するに過ぎず、且つこれを彼は一つの既成事實として認める外はないのである。經濟の意義はこの比較的不足した諸財貨の增加である。諸財の增加は既存の財貨量を考慮し、勞働の媒介によつて變化を加へ一層高次の財とする外はない。生產者は彼自身が生產したるものを自家用として消費せず、第三者の充用に供するが爲調達するものであつて、交換財の製造に必要なる原料の原價は確保されるのみでなく、實際上は高められ、その財的犧牲は社會によつて承認され受入られる。此の當初の生產物と最終の生產物の間に價値段階が存在せねばならぬ。價値の增加すると云ふ條件の下に於てのみ生產者は彼の提供する財貨と引換に彼の財犧牲に對する代替物を受け取るのみでなく、更に彼自身の欲望を充足するため第三者の提供する財貨の處分權を確保するやう考慮する。此事實から財貨の生產的消費は無選擇且つ無計畫ではなく目的を意識して遂行されねばならない。一定の狀況に於ては價値段階が絕えず目的の遂行に影響を與へるのであるが此目的を選擇して遂行することを要請せられるのである。

教授が殊に問題としたのは國民經濟學の如く集團現象たる價格の全體的傾向の決定ではなくて、他の集團現象たる計畫的價格準備現象即ち、一定の條件の下に於て一定の生產物の生產と、而してそれが一定の價格構造に導くところの諸計量と、諸方策の全部がこれである。經濟することは總て素材と素材との間の絕えざる選擇行爲である。諸財を生產的に消費することは素材の價値が誘因する素材轉換の一種である。經濟主體が比較行爲を行ふことは經濟すると總てに通ずる本質である。比較行爲こそ比較勞働から生れた素材犧牲の諸方策に目的と方向とを與へる。（注一）又經濟は總て…一定の方向に向ひ且一定の法則性によつて經濟的諸量の運動と變更とを惹き起す評價現象に貫かれてゐると云ふことも云へやう。しかし總ての評價現象が科學的認識の對象であるとは云へない。少なくとも經濟科學の對象ではない。たゞ外部に現はれる欲望を精確に測定出來るか否かに關聯してゐる問題である。吾人は教授と共に欲望を生產的欲望と消費的欲望に區別せねばならぬ。消費上の欲望は一般に正確には測定し得ないが又勞働する人々の生產的欲求とか意慾とか云はるゝもの多くの場合測定し得ない。欲望の測定は心理學の範圍に屬する。

教授によれば全經濟の内部に於て生産的欲望を正確に測定し得る或限定された目的範圍だけがある。それは新しい諸財の生産に從事してゐる總ての經濟單位である。而して此等經濟單位は生産と消費に於て國民經濟單位に結び付けられてゐるが故に一般に價格の中に費用の測度と給付に對する測度とを見出すものである。此規準は經營經濟學の範圍を限定するに決定的重要性を有するのである。教授は上述の理由から家計經濟學を除外してゐる。廣義の意義に於ける總て生産經營は原則的に單に商業經營のみならず、工業並びに銀行經營交通經營、組合經營團體經濟の經營など包含されてゐる。しかし農業經營は學問上の分業に關する理由から經營經濟學の範圍外に置かれてゐる。しかして生産經營が科學的觀察の出發點として妥當な性格を有するのは經營に於ける評價能力が歴史的發展の過程に於いて、高度に完成したると、更に又經濟の正確化を計り、物や價値の一般的性質を測定することを主たる任務とする機關を發達せしめてゐることによるのである。

評價事象に確實なる根基を供する爲經濟が創造したる諸制度の集合體が經營計算制度である。我々はこゝに教授の觀察を決定的に高揚せしめんとした一目標を發見する。この目標は教授の問題設定を必然的に齎らすものであつた、經營計算制度は完結せる評價機關であり、謂はゞ經營内に於ける自然的刺激機關の感受性を以て經營經濟内部の缺陷と故障を露呈するものである。これを教授は身體の内部に或刺激が發生したる際之に對する防護作用を爲す神經組織に比してゐる。

經營計算制度の最高使命は最も一般的に云つて、觀察と統制に外ならぬ。觀察と統制の本質は生産過程に消費される諸財貨の價値量が生産された價値量に比して如何にあるかを觀察し統制することである。これは第三者の需要に對し經濟すると云ふ問題から當然起る根本問題である。交換經濟が中小經營から成立してゐる限り、その生産が多くの場合地方市場のみに依存してゐるやうな場合經濟的刺激機能としての機能を可成信頼し得る程度に果し得たのである。然るに經營範圍の擴大、生産技術の複雜化、更に著しく進展したる生産過程の分化と集中に伴ひ總ての生産經濟の主體にとつて、市場經濟的刺激機能を經營自體の内部に移し以てその職能を豫め行ひ、どの經營部門の生産過程に對しても更に製品の如何なる部分に對しても市場に於ける製品の販賣が何等支障なく實現せられる樣に豫想し得らるゝ如くする必然性が明らかに強くなつたのである。經營計算制度かゝる機能を果さねばならぬ。云はゞ國民經濟的刺激機能の經營内部への延長と云ふ可きである。

シュマーレンバッハ教授が經營經濟學に於て提起したる問題は本質的には、經營が給付交換であると云ふ必然的事實から經營内相互或は第三者との間に起る全問題である。此の場合經營の外部生活の問題卽ち經營がその取りまく環境に關聯する問題と經營内の諸事實及び與件を記述し表明する經營の内部生活に於ける問題とを屢〻區別して取扱はねばならぬ。前者の外部問題の範圍は財政或は商人簿記（Finanz-oder Kaufmännische Buchführung）であり後者の内部問題は經營簿記の範圍に屬する。此場合簿記とは數量的に把握し得る價値評價を全面的に記述し計畫的を綜括した文書の意味に用ひ廣義の體系的簿記法とともに統計をも包含するものである。財政簿記と經營簿記との相違は前者が本質的に負債問題と之に關聯せる交換手段の管理の問題を取扱はねばならぬに反し、後者は前者の過程を觀察し、經營の特殊の給付を監掌するものである。卽ち、特殊なる給付が招來せる成果、卽ち生産の經濟性經營保有量の合目的な管理を取扱ふものである。

教授は經營の内部生活を取扱ふ方向を經營の外部生活を扱ふ方面に比して極めて重視してゐる。故に彼が取扱ふあらゆる問題の焦點があつた。卽ち經營内部の評價問題は經濟一般の問題の中心問題である。吾人は諸財貨交易以前に

起る評價（見積）と諸財貨生産後に起る成果計算と區別せねばならぬ。前者の第一の部類に屬する評價問題は豫算編成（Budget Rechnung）資本調達を包含するものであり、原價計算、年次成果計算、短期成果計算は經營價値計算の第二部類に屬する主要問題である。それ等の成果に基いて狹義の經營組織の問題が展開される。これは統制と決定を取扱ふものではなくて經營組織の意圖を以て組織上の諸方策を解明するものである。此處に議論の對象となつて居る純然たる機能上の動的諸問題がある。最適經營組織の問題は之等に關する多數の諸問題を內包する。即ち操業度、固定費の問題、經營比較の問題、相對的最適經營能力維持の見地に立つ價格政策の問題等何れも個別經濟の必然的な給付交換によつてであつて國民經濟の內部に於て行はれねばならぬ價値並に價値計算から發生する問題である。

註1　Schmalenbach; Selbstkostenrechnung und Preispolitk 2 auf. S. 13.

マルクスの階級論について

――一つの覺書――

平井新

一

マルクシズムは一般に勞働者階級解放の理論であるといわれているが、事實マルクス―エンゲルスの諸著作中には、階級別、階級利害、階級對立、階級意識、階級鬪爭等の言葉が不斷に使われていて、流石に階級的學說であるとの感を深うすると共に、階級の概念がマルクシズムの體系において占める地位の重要なることに氣付くのである。

一般に社會科學においても階級概念については異說區々として定まるところがない有樣であるが、それは暫く措いて、マルクスは階級概念をどうように理解していたか、この問題をたずねて見たいと思う。

われ〳〵が不審に思うことは自ら勞働者階級の代辯者を以て任じ、あれほどに「階級」を口にしたマルクスの數多い著作中にも階級論に關する系統的な作品が全くないことである。じかし、このことが彼がこの問題を輕視したためでないことは遺稿「資本論」第三卷の最後尾（第七篇（第五十二章）に「諸階級」の一章があることによつても親われる。ところが眞に遺憾なことには、この一章も僅かに一頁程度の斷片で未完成のまゝに中絕してしまつているので、彼が階級論の眞意は無論のこと、その片影すらも容易に掴めないという有樣である。しかし、たとえ斷片でも數少ない彼の階